

【報告】

・【2018PCカンファレンス開催報告】

テーマ：ひらめき ときめき はばたき

開催日：2018年8月24日（金）25日（土）26日（日）

会場：熊本大学黒髪キャンパス（〒860-8555 熊本市中央区黒髪2丁目39番1号）

公式サイト：<http://gakkai.univcoop.or.jp/pcc/2018/index.html>

・【PCカンファレンス北海道2018】

テーマ：プログラミング教育必修化がもたらす未来

開催日：2018年11月3日（土）12:30～17:00・11月4日（日）9:30～15:00

会場：北翔大学「北方圏学術情報センターPORTO」

・【CIEC第117回研究会報告書】

テーマ：学びの空間としてのラーニングコモンズ

開催日：2019年1月5日（土）13:00～17:00

会場：早稲田大学 中央図書館 1階 会議室（〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1）

共催：小中高部会・オープンエデュケーション部会共催

【2018PCカンファレンス開催報告】

今年のPCカンファレンスは開催校である熊本大学の全面的なご協力のもと開催されました。小中高教員、大学教職員、大学生協職員、学生、企業やNPOなど幅広い分野から約800名の参加者で盛会のうちに終了いたしました。基調講演、シンポジウム、セミナー、分科会報告などを通じて互いに学び、交流を深めることができました。来年度以降のPCカンファレンスの開催に向けて、さらに多くの方に参加していただけるように益々魅力のあるものへと充実させていきます。

開催テーマ：ひらめき ときめき はばたき

開催日時：2018年8月24日（金）25日（土）26日（日）

開催場所：熊本大学黒髪キャンパス

（〒860-8555 熊本市中央区黒髪2丁目39番1号）

主催：一般社団法人CIEC（コンピュータ利用教育学会） / 全国大学生生活協同組合連合会

実行委員長：安藤新二（熊本大学・熊本大学生生活協同組合理事長）

副実行委員長：熊坂賢次（慶應義塾大学・CIEC会長理事）

北村士朗（熊本大学・CIEC副会長）

後援：熊本大学、文部科学省、経済産業省九州経済産業局、熊本県教育委員会、熊本市教育委員会、

熊本日日新聞社、NHK熊本放送局

参加費：一般：5,000円/学生・院生：1,500円※税込

※参加申込締切（8月10日）以降は一般6,000円学生・院生2,500円

※レセプション5,000円、イブニングセッション500円は別途

(1) 参加登録者数：791名

(2017:慶應義塾大学 812名/2016年:大阪大学 770名 /2015年:富山大学 702名/2014年:札幌学院大学 741名)

(2) 各企画報告（敬称略）

8月24日（金）

【プレカンファレンス】 9:30～11:30

「小中校の授業におけるタブレット活用」

パネリスト

山口修一（熊本市立弓削小学校）

中島千晴（熊本大学教育学部附属小学校）

森棟隆一（白百合学園中学高等学校）

八百幸大（早稲田大学高等学院）

コーディネーター

前田康裕（熊本大学大学院教育学研究科 教職大学院）

【全体会】12:00～13:50

開会挨拶 安藤新二（PCカンファレンス実行委員長、熊本大学）

開催校挨拶 原田信志（熊本大学学長）

主催者挨拶 熊坂賢次（CIEC会長、慶應義塾大学名誉教授）

【基調講演1】

「CPSとSDGs：科学技術の加速度的進展とグローバルな制度形成が近未来の社会を激変させる」

妹尾堅一郎（特定非営利活動法人産学連携推進機構理事長、CIEC前会長理事）

【基調講演 2】

「AI 時代」のはばたきとまばたき

関口智嗣(国立研究開発法人産業技術総合研究所理事兼情報・人間工学領域領域長)

【シンポジウム 1】 15:30~17:30

「AI, IoT とビックデータが創るこれからの学び」

話題提供及びパネリスト

中田寿穂(日本マイクロソフト株式会社パブリックセクター事業本部クラウドアーキテクト)

パネリスト

妹尾堅一郎(特定非営利活動法人産学連携推進機構理事長, CIEC 前会長理事)

関口智嗣(国立研究開発法人産業技術総合研究所理事兼情報・人間工学領域領域長)

コーディネーター

熊坂賢次(慶應義塾大学名誉教授, CIEC 会長理事)

【シンポジウム 2】 15:30~17:30

「オープンエデュケーションの挑戦—MERLOT との協働として CIEC 活動のさらなる活性化へ—」

パネリスト

Gerard L. Hanley (Executive Director, MERLOT CSU Office of the Chancellor)

重田勝介(北海道大学情報基盤センター)

尾崎拓郎(大阪教育大学情報処理センター)

武沢護(早稲田大学大学院/高等学院)

コーディネーター

吉田晴世(大阪教育大学)

【ラーニングスタジオ】 15:30~17:30

「電子書籍プラットフォーム Varsitywave eBooks を活用した電子教科書授業体験」

講師

小田部荘司(九州工業大学大学院情報工学研究院)

出貝裕子(宮城大学看護学群)

コーディネーター

三浦貴司(全国大学生生活協同組合連合会)

【イブニングセッション】

<ワークショップ型><交流型> 18:00~19:45

<ワークショップ型>

(1)「iPad を使ったデジタル教科書の模擬授業体験会」

(2)「クリッカー触れて語って 75 分」

(3)「micro:bit ではじめるマイコンプログラミング」

(4)「サイバー攻撃確認! インシデントレスポンス机上演習(TTX)体験」

(5)「経済学の理論用学部生講義で使える Windows 用ソフトウェア」

<交流型>

(1)「本当にあった怖い IT 不活用ばなし~大学働き方改革のために~」

(2)「大学生協 PC 講座のスタッフの成長と育成を考える」

(3)「VR コンテンツ制作環境を利用した新しい教育手法」

(4)「大学生協の電子書籍ビューワを活用し新しい教育を創造するには」

(5)「教師が作る「本当にインタラクティブなデジタル教科書」

(6)「一教具としてのタブレット導入を成功させるために必要なこと」

8月25日(土)

【教育・IT フェア】 10:30~17:00

64社74ブースの出展がありました。(2017年:78ブース/2016年:73ブース)

各分野の「最新」「最先端」の技術情報を入手, また実際に機器やソフトを試すことができ, 教育・研究素材の収集や交流の場として大変好評でした。

【分科会】

口頭発表 88本 ポスター発表 32本

<口頭発表テーマ>

8月25日(土) 9:00~11:55	8月25日(土) 15:30~17:25	8月26日(日) 9:00~11:25
A: 大学生協 (1)	A: 大学生協 (2)	A: eラーニング
B: 語学教育	B: デザイン教育	B: 科学教育
C: 情報教育 (1)	C: 情報教育 (2)	C: 授業方法
D: データ活用・意識調査	D: SNS	D: 映像・画像
E: 学外連携	E: 教育・学習のプラットフォーム	E: 協調・アクティブラーニング
F: プログラミング教育 (1)	F: 電子教科書	F: プログラミング教育 (2)

■最優秀論文賞 1 件

鈴木公貴(三重大学工学研究科電気電子工学専攻)

「解答の入力停滞からの学生の自信がない語の検出の試み—停滞の判定基準に関する検討—」

■優秀論文賞 3 件

岡本真由子(愛知県立瀬戸窯業高等学校)

「多様な創発手法の体系化と実践事例の分析」

佐藤和彦(室蘭工業大学大学院しくみ情報系領域)

「異国間児童の交流を支援するアプリケーション開発とネパールでの試用実験の報告」

渡邊ゆきこ(沖縄大学人文学部国際コミュニケーション学科)

「発話を促す多言語教材の開発—外国語教育における音声認識・合成 API の可能性—」

■学生論文賞 1 件

近藤崇祥(金沢工業大学情報フロンティア学部)

「双方向授業システムのグループ集計機能」

【CIEC 団体会員発表セッション】 9:00~11:55

(1) 株式会社内田洋行

「タブレットを無線で自由に投影等, ディスカッション支援ツールのご紹介」

(2) 株式会社ワークアカデミーnoa 出版

「学び×出会い=成長」~新しい学び空間「UMEDAI」のご案内

(3) 日本マイクロソフト株式会社

「学び方」と「教え方」を豊かにするマイクロソフトソリューションのご紹介

(4) 株式会社ナレロー

「MS-Office 操作スキルを測定するコンピュータ適応型テスト」

- (5) シネックスインフォテック株式会社
「深い学びを実現する、支援ツールのご提案」
- (6) チェル株式会社
「語学学修プラットフォーム「CaLabo Language」を活用した“話す”力を鍛える手法と活用事例」
- (7) 株式会社モリサワ
インクルーシブ教育の実現のために「フォント」を変える
- (8) 株式会社朝日ネット
「全国の大学で利用される LMS・ポートフォリオシステム：manaba とは」
- 【レセプション】 18:00~19:45
- | | | |
|----------|------|-----------|
| 司会 | 竹山英紀 | 熊本大学生協同組合 |
| 実行委員長挨拶 | 安藤新二 | 熊本大学 |
| 開催校挨拶 | 古島幹雄 | 熊本大学副学長 |
| 主催者挨拶 | 毎田伸一 | 全国大学生協同組合 |
| 乾杯挨拶 | 佐藤宗治 | 鹿児島大学 |
| 次年度開催校挨拶 | 鳩貝耕一 | 甲南大学 |
| | 篠田有史 | 甲南大学 |

8月26日(日)

【セミナー1】 12:00~13:30

【セミナー3】 13:45~15:15

「デジタル教科書「当たり前」時代の到来を前に」

パネリスト

中野淳(日経BP社PCメディア編集部長/教育とICT Online編集長)

松下毅彦(広島大学医学部附属医学教育センター准教授)

水越康介(首都大学東京経済経営学部准教授)

司会

内赤尊記(CIEC生協職員部会世話人)

【セミナー2】 12:00~13:30

「MERLOTアンバサダーになろうーOERをいかに評価するのかー」

講師

Gerard L. Hanley (Executive Director, MERLOT CSU Office of the Chancellor)

コーディネーター

吉田晴世(大阪教育大学)

武沢護(早稲田大学大学院/高等学院)

【セミナー4】 13:45~15:15

「CIEC会誌『コンピュータ&エデュケーション』をより良くするために

ー学会のさらなる発展に資する会誌を目指してー」

パネリスト

中村泰之(名古屋大学, CIEC会誌編集委員)

籠谷和弘(関東学院大学, CIEC会誌編集委員)

浅野純一(岡山理科大学, CIEC会誌編集委員)

松浦執(東京学芸大学, CIEC会誌編集委員)

【PCカンファレンス北海道2018】

2001年から開催されているPCカンファレンス北海道は今年で16回目となった(途中、2007年と2014年は全国大会のために開催せず)。

今年度、PCカンファレンス北海道2018は、2018年11月3、4日、初めて大学のキャンパスを飛び出し、札幌市内にある北翔大学の北方圏学術情報センターPORTO(ポ

ト)を会場に開催した。

今年のテーマは、「プログラミング教育必修化がもたらす未来」とし、2020年から小学校で必修化されるプログラミング教育を念頭にカンファレンスを構成した。

特別講演には文部科学省がすすめる小学校におけるプログラミング教育について日本一詳しいと言われている、国立教育政策研究所の鹿野利春氏をお招きし、「新学習指導要領で育む情報活用能力」と題して、文部科学省が新学習指導要領の中で描いている次世代を担う子供たちのプログラムの思考を育成するための意義とビジョンについてホットで詳細な話を聞くことができた。

また、初めての試みとして「教育ワールドカフェ」と題し、ワールド・カフェ形式のワークショップを開催した。運営はCIEC小中高部会の世話人が行い、ファシリテーターは平田義隆先生(京都女子中学校・高等学校)が務めた。こちらのテーマも「プログラミング教育必修化がもたらす未来」で、小学校、中学校、高等学校、大学におけるプログラミング教育について、その学習内容・方法、学習教材、指導方法や校種間・産学連携などに関してリラックスした雰囲気の中で話し合いを行なった。

参加者は小中高大の教員、大学生、大学院生、ソフトウェア開発者など多彩であった。ワールド・カフェ形式のワークショップに参加したことのある方は少数であったが、できるだけ知り合いが含まれない4人が1テーブルを囲み、テーマに関する議論(会話)を楽しんでもらった。

ワールド・カフェの基本通り、3つのラウンドを行い、話し合いの後で自主的に3つのグループから議論の内容が発表され全体で共有した。

発表では、「プログラミングを教えることで終わってはいけない」「ゴールがはっきり見えないのでどのように進めていけばよいかわかりにくい」などの意見が出された。

最後に大切だと思ったことや、新たな発見など1枚の紙に書いてもらい、スクリーンに全員で貼ってまとめて代えた。参加者の満足度も高く、良い雰囲気で行なわれた。





分科会には19本の発表があり、そのうち10本は北海道外からの参加者の発表でPCカンファレンス北海道がCIEC会員に広く浸透し、研究発表の場として重要な役割を果たしていることを実感した。

例年、分科会発表者の中から、学生、院生を対象に学生プレゼンテーション賞を贈呈しており、今年度は次の2名が受賞となり賞状と副賞が手渡された。

「小学校のプログラミング教育必修化における教育の手法に関する報告」

千歳科学技術大学 伊藤 優さん、

「北見工業大学において好まれるゲームジャンルとそのプレイ時間がもたらす単位修得への影響の解析と学習傾向の分析」

北見工業大学 佐々木優弥さん

また、ITフェアでは最新の機器や技術などに実際に触れることができ、出展いただいた次の8社の皆様には心から感謝する。

株式会社沖データ様、日本データパシフィック株式会社様、株式会社トレミール様、エム・ティ・プランニング株式会社様、富士通株式会社様、富士電機ITソリューション株式会社様、株式会社ワークアカデミーnoa出版様、株式会社日経BPマーケティング様

余談になるが、1日目夜に会場近くで懇親会を開催し、新鮮な北海道の肴と美味しいビールで参加者同士の親交を深めることができた。



2019年度のPCカンファレンス北海道は北見工業大学での開催を予定しており、多くの皆様の参加を期待するものである。

高瀬敏樹（札幌市立札幌旭丘高等学校）、森夏節（酪農学園大学）

【CIEC 第117回研究会】

【開催概要】

テーマ 学びの空間としてのラーニングコモンズ

開催日 2019年1月5日(土) 13:00～17:00

会場名 早稲田大学中央図書館1階 会議室

(〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1)

共催 中高部会・オープンエデュケーション部会共催

【プログラム】

13:30～13:40 開会の挨拶

13:40～14:20 講演「新しい図書館のありかた ～ラーニングコモンズとコンソーシアムを中心として～」

深澤良彰氏（早稲田大学図書館長・基幹理工学部教授）

14:30～15:10 講演「これからの大学図書館の在り方」

中山貴弘氏（大阪教育大学 学術情報課長）

尾崎拓郎氏（大阪教育大学 情報処理センター）

15:10～15:50 早稲田大学中央図書館 ラーニング・コモンズ見学

16:00～16:30 ディスカッション

司会：石谷正（北海道網走南ヶ丘高等学校・CIEC 小中高部会世話人）

【開催報告】

プログラム前半は早稲田大学図書館長・基幹理工学部教授、深澤良彰氏よりラーニングコモンズと図書館コンソーシアムの話題を中心として新しい図書館のあり方について講演があった。能動的学修、プロジェクト型学習、反転学習などに代表される新しい教育/学習方法の登場により教育方法に変革があること、またプロジェクト型研究への研究費のシフトなど研究方法にも変革が起きていること。これら教育と研究の変化に対応していくため図書館自身も変革が必要な時期に差し掛かっている。その変革のひとつとして、早稲田大学中央図書館にラーニングコモンズを整備することになった。早稲田大学の場合、キャンパスが分散していたり、学部1年生から大学院生のみならず、早稲田大学高等学院の高校生にも対応できたりする必要があるため、集中ではなく分散型のラーニングコモンズを設置する必要があることが示された。図書館の中に設置されたラーニングコモンズや教室を改装して設置されたラーニングコモンズ、留学や統計処理のサポートなど機能別に学内に様々なラーニングコモンズを実現してきた経緯がある。ラーニングコモンズを整備するために、なぜ図書館に作るのか、本を減らしてまで作るラーニングコモンズと教室を改装して作るラーニングコモンズの違いとは何かなどを図書館員と議論し、アカデミックな雰囲気を残しつつ設計したことが述べられた。「資料の活用・多様な学習/研究スタイルへの適応・相互交流/啓発・人的サポート」の4つをラーニングコモンズのコンセプトとし、図書館内の館内ゾーニングを見直し、4つのゾーンに分けたことが示された。(図1, 2)

館内ゾーニングの整備

利用者のニーズが多様化していることを受け、目的別にゾーニングし、従来の想定になかった図書館内利用を可能に

エリア/ Areas	ルール/ Rules
Active Area	ラーニング・ commonsとして機能が可能なエリア。プロジェクタやホワイトボードも利用可能
Quiet Area	電話を禁、静かな学習・ 研究環境を確保するエリア。PGや電卓の使用・ しての作業を行うことが可能
Silent Area	特に静かな学習・ 研究環境を維持するエリア。電話は勿論のこと、電卓やPCなど、の音の出る機器の使用も禁
Super Silent Area	館内で最も静かな学習・ 研究環境を維持するエリア。全ての機器も使用・ 禁、静かな環境を維持

Copyright © Waseda University 2019. All rights reserved.

(図1) 館内ゾーニングの整備

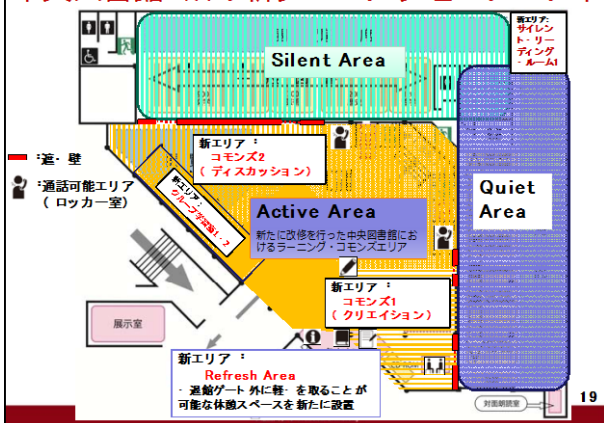
(まだ少しですが) 中央図書館LC改修工事の効果検証

		座席数	利用数	利用率	エリア利用率	2017年同エリア利用率
2階	2階 Active Area	23	6	32%	32%	20%
	2階 Silent Area	22	3	13%		
3階	3階 Active Area	29	9	40%	34%	36%
	3階 Active Area	17	5	31%		
	3階 新聞雑誌コーナー	8	3	34%		
	3階 Silent Area2	22	6	32%		
Active Area	2階ホワイ	5	2	56%	52%	38%
	2階ホワイ	19	4	41%		
	2階カフェスペース2	6	3	59%		
3階 Active Area計		142	55	36%	29%	

Copyright © Waseda University 2019. All rights reserved.

(図4)

中央図書館2階の新ゾーニングとコンセプト



(図2) 中央図書館2階のゾーニング

中央図書館ラーニングcommonsは2018年10月1日にオープンした。平均入館数は昨年度に比べて増えてきていること、滞在時間も長くなってきて資料を利用する時間も増えていることからラーニングcommonsに学生が集まってきたことが示された。(図3, 4)

(まだ少しですが) 中央図書館LC改修工事の効果検証 (2018年12月館内利用調査)

2018年度改修工事前後の、1日の平均入館者数

	6月	7月	10月	11月
平均入館者数	2211	2748	2088	2250
前年度同月比	-216	-303	145	79

調査日における滞在時間および閲覧・資料利用量

調査時間帯	延べ滞在時間 (単位:分)		延べ閲覧量 (単位:分)		閲覧率		延べ資料利用量 (単位:分)		資料利用率	
	2017	2018	2017	2018	2017	2018	2017	2018	2017	2018
9:00-12:00	24650	30960	10620	11740	43.1%	37.7%	15480	20700	62.8%	68.4%
12:00-15:00	8420	8820	2520	3020	29.9%	31.0%	4120	6300	48.8%	64.7%
15:00-18:00	9610	10760	4900	2800	47.8%	27.5%	7050	6120	73.4%	60.7%
18:00-22:00	7260	9680	1840	3520	21.7%	36.6%	4560	8120	62.5%	83.7%
全日	27810	32780	9760	10680	35.1%	32.2%	17860	22640	62.1%	69.3%
※入館者1人ごとの滞在時間・利用量	104.9	114.8	36.8	37.0			65.2	73.5		

Copyright © Waseda University 2019. All rights reserved.

(図3)

深澤氏は世代別ラーニングcommonsについて定義された。ファミレスのような椅子や動かせる机など什器だけが置いてあるラーニングcommonsは第1世代の古いラーニングcommonsであり、日本の多くのラーニングcommonsはこのレベルで止まっている。同志社大学の良心館はワンストップサービスで様々なサービスが提供されているところが優れており、様々な機能をラーニングcommonsに展開していくことが課題であると述べられた。教育・研究の変化に対応する学習支援・研究支援環境の整備が次のステップであり、図書館として何がどうできるのか、学生や研究者によりそうには何が求められるのかを考えているとラーニングcommons整備のまとめとして述べられた。(図5, 6)

世代別ラーニングcommons

- 第1世代 :スペースを確保して、そこに什器を整備
 - 日本の多くのラーニングcommonsはこのレベル
 - 453大学 (全778大学の58.2%) で、ラーニング・commons整備・活用※
 - この5年間で約2.5倍に増加
 - 特に、国立大学においては、その91.9%で整備終了
- 第2世代 :第1世代のラーニング・commonsにおいて、各種のサービスを展開
 - 同志社大学 良心館
- 第3世代 :第2世代のラーニング・commonsにおいて、学習支援・研究支援環境を整備

※文部科学省、平成28年度学術情報基盤実態調査—大学における教育研究活動を支える大学図書館及びコンピュータ・ネットワーク環境の現状について—
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/03/1383655.htm

Copyright © Waseda University 2019. All rights reserved.

(図5)

今後考えていくべきこと

- ラーニングコモンズにおける学習・研究支援環境の実現
 - どんな機能・サービスを提供すべきか
 - 飲食、各種相談（ライティングセンター、留学、カウンセリング等）、英語スペース等
 - 更なる図書館としてのサポート
 - 各学術院、研究科等との連携、協力体制の構築
 - 助手・助教の活用
 - 什器、ハードウェアの追求
 - 協同学修を支援するハードウェアのあるべき姿
 - 支援ソフトウェアの実現・選定
 - 大学院学生等をどのように利用していくか
 - 非常に質の良いスチューデントジョブ
 - 学生・教員等への周知

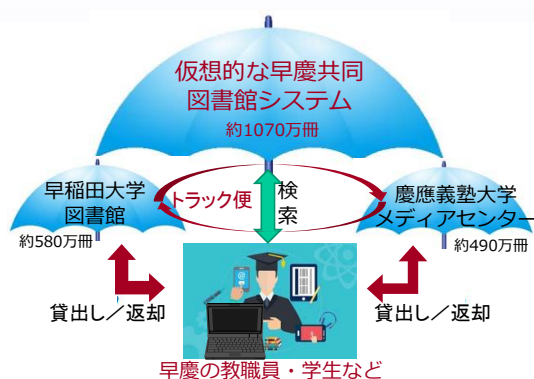
28

Copyright ©Waseda University 2019. All rights reserved.

(図 6)

続けて、図書館コンソーシアムの話があった。大学図書館における運営費と図書資料費について各大学とも予算が軽減される中で電子ジャーナルのコストが高騰していること、平成 28 年には紙の図書の費用よりも電子図書の費用が上回る中で、他大学と組んで相互利用できないか検討している。具体的には慶應大学の図書館とコンソーシアムを組むことで、利用者 1000 万人規模の早慶図書館ができることが示された。1986 年より早慶図書館の相互利用協定が締結されており、自分の大学で購入した書籍は自分の大学の教職員・学生だけのものであるという概念を捨て早慶での図書館業務の共同化実現のための体制の確立方法や課題を示された。現在開発中のシステムでは早稲田大学、慶應大学それぞれのシステムに加えて、仮想的な早慶共同の図書館システムがクラウド上に存在する。(図 7) これらのシステムが完成後期待される効果として図 8 のようなサービスの向上、書誌データ調達コストの軽減があると示された。

現在開発中のシステムの構成 (利用者目線)

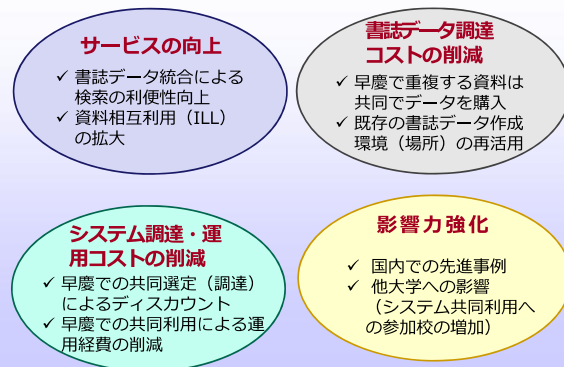


Copyright ©Waseda University 2019. All rights reserved.

44

(図 7)

期待される効果



Copyright ©Waseda University 2019. All rights reserved.

46

(図 8)

プログラム 2 つ目では大阪教育大学学術情報課長中山貴弘氏、大阪教育大学情報処理センター尾崎拓郎氏から「これからの大学図書館の在り方」について講演があった。中山氏はこれまで、貴重資料の電子化、機関リポジトリ、電子ジャーナルの契約など電子図書館の構築やラーニングコモンズの設置・運用に従事してきた。本講演では大学図書館のトレンドと大阪教育大附属図書館の活動について示された。大学の図書館のトレンドは 90 年代電子化・情報化が進展し、図書館へ行かなくてもサービスが提供されたり、研究室からでもアクセスできるようになってきたりした。法人化により予算が削減されていく中で、電子ジャーナルの価格は高騰し続ける、などの課題がある中で「出会い系」と「アウトリーチ系」という 2 つのキーワードを出され、現在の取り組みを紹介された。日本で初めてラーニングコモンズを取り上げた文献では、「学部教育において学習理論が知識の伝達から知識の創出・自主的学習に移行したことを反映したネット世代の学習支援を行う図書館施設もしくはサービス機能」と紹介されており、各大学ではアクティブラーニングへの転換と情報入手がインターネット化した時代に対応する学習支援の場所、また出会いの場として、ラーニングコモンズを設置してきた。ラーニングコモンズを構成する要素として、「情報資源の入手とそのため情報リテラシー教育」と「アクティブラーニングを行う場所」の 2 つがあるが、情報リテラシー教育という側面が重視されていない。また、学習支援は提供されているが、あまり利用されていないことが利用者に伝わっていないのがラーニングコモンズの課題であると述べられた。2 つめのキーワードであるアウトリーチとは、元々は「手を差し伸べること」であり、文部科学省の定義では、図書館サービスの圏域内であるにもかかわらず、これまでの図書館サービスが及ばなかった人々に対してサービスを広げていく活動のことである。近年、アメリカの大学図書館では、対面でない、あるいは図書館外で提供されるサービスを広くアウトリーチサービスと呼ぶことが一般的で、具体的にはライブラリアンが図書館の建物を出て直に教育・研究の現場でサービスすることで、学生・教員を対象とした個別相談やワークショップ、ニュースレターや調べ物ガイドの作成、情報リテラシー教育戦略のためのカリキュラムマッピング、教員に機関リポジトリへの寄与を促すなどが

司書の仕事の半数近くを占めていると説明された。大阪教育大附属図書館ではアウトリーチ活動の一環として、図書館職員が授業に出て行って情報リテラシーを教えることを行っている。1回生対象の教職入門、これから卒論のテーマを決める3回生対象の英語科評価論において情報検索実習を行った。またアウトリーチ活動の目玉として図書館員のオフィスアワーを設けたが利用がなく、図書館員に質問していいということを知らない学生が多いことが明らかになった。図書館は他の部局と連携して大学として学生にやっている学習支援を一体的にやっていく必要があるため、学生の活動についてもっと具体的に知る必要があったり、図書館のサービスを館内に限定する必要はなくもっと図書館から出て行ったりした方がいい、とこれからの大学図書館についてまとめられた。

続けて尾崎氏からは、パソコン必携化後どのように活用していくかの話が提供された。情報基礎科目を全学共通内容と専攻独自内容で構成したことや学習支援ツール・テストツールなどを利用して、コンピュータの必携化後どこでもPC教室になり、学生の身近なツールとして利用できる環境づくりを行っていると示された。コンピュータ必携化に際して、ヘルプデスクの存在が不可欠となり、学生の手を借りながらICT教育支援ルームを立ち上げた。そこでは新しいコミュニティが形成されている。ヘルプデスク主催の講座を開催して、ラーニングcommonsを会場として図書館の学生サポートスタッフと共同で企画を行っている。レポートの書き方とプログラミング体験講座を開催した。11月には電子黒板利用者講習会も開催した。コンピュータ必携化した取り組みは、うまくはいつているものの、学生が使いこなすまでには至っていない。学生がICTを活用するための促進剤としてヘルプデスクを利用していくことが示された。

講演後は、ラーニングcommonsの施設見学を行い、質疑応答を行った。質疑応答では、中央図書館ラーニングcommonsの立地について、今後設置予定の3階ラーニングcommonsをどのような規模で設計するのか、図書館内の段差について、什器の設置について、ラーニング設置者が願うラーニングcommonsでの過ごし方、正しい使い方など幅広く議論が交わされた。



(文：森棟隆一 白百合学園中学高等学校・CIEC 小中高部会世話人)

